月影

第68号

令和二年十一月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院

# 共に生きている

紅葉した葉は
落ち葉となり
土に還(かえ)る

姿無き葉は
土の中で
その樹の栄養となる

浄土に往生した人は
神通力(じんつうりき)を得て
再びこの世に還(かえ)る

姿無き人は
想う人の心の中で
共に生き続ける

# 開宗八五〇年 法然上人の生涯

【五】

## 嵯峨清涼寺へ

### 七日間の参籠

比叡山で修行の日々を送る法然上人は、学べば学ぶほど疑問と苦悩が起こり、救いの確信を得られない苦しみが増していました。

一一五六年。法然上人は比叡山をいったん下り、嵯峨清涼寺に七日間参籠されました。

嵯峨清涼寺の釈迦堂に安置されているご本尊は、お釈迦様が生きていた時の姿を模したとされる「生身の釈迦像」といわれ、広く民衆の信仰を集めていました。

### 嘆き苦しむ民衆

この年は、保元の乱が起こり、京都は戦乱に巻き込まれていました。

嵯峨釈迦堂には、大切な人を失った人、財産を失った人など、老若男女を問わず苦しみにあえぐ大勢の人々が参っていました。

そんな人々が一心に祈っている姿を目の当たりにして、法然上人は大きな衝撃を受けました。

この人々を救うことが、仏教の役割であり、僧侶の使命であると改めて心に刻まれました。

## 奈良へ

### 南都遊学

嵯峨清涼寺で感じたことを胸に法然上人はそのまま奈良へ向かいました。

当時、「南都」と呼ばれていた奈良は、華厳・三論・法相・律などの学派があり、比叡山と同じく仏教の学問における中心地でした。

法然上人は、自らの学識を深めるために、奈良の高僧たちを訪ね歩きます。

法然上人に会った高僧たちは、法然上人の深い知識と正しい理解を認め、ほめたたえました。

法然上人は高僧たちとの対話を重ねたものの、すべての人々を救う教えを見つけることはできず、再び比叡山に戻りました。

比叡山に帰った法然上人は、「報恩蔵」と呼ばれる経蔵にこもり、あらゆる経典を読み、自身の求める教えを探し続けました。

（つづく）

# 仏事と作法

## お十夜

### お十夜とは

「お十夜」と呼ばれる法要は、正式には「十日十夜別時念仏会」といい「この世で十日十夜善いことをすれば、仏国土で千年善いことをしたことに勝る」という、無量寿経の教えをもとに、阿弥陀様の法恩に感謝し、お念仏の尊さを感得する法要です。

浄土宗、天台宗寺院にとって、年中行事の中でも大切な法要です。

勤める時期は、十月または十一月に勤められます。当寺では、毎年十一月十四日に勤めています。

### お十夜のはじまり

今から約五百五十年前。足利義教公の執権職をしていた平貞経の弟である平貞国が、この世の無常を感じ出家して仏道に生きようと、京都の真如堂にこもってお念仏の行をされました。

三日三夜の行が終わったら髪を落として出家しようと決意していた三日目の明け方、貞国の夢枕にお坊さんが現れて「阿弥陀さまを信じる気持ちが本当なら、出家する出家しないは関係ないではないか。出家するのは待ちなさい」とお告げをされました。

貞国が出家を思いとどまって家へ帰ってみると、兄は上意に背き吉野に謹慎処分。代わりに貞国が家督を継ぐようにという命令が下っていました。

貞国は「兄は謹慎処分。もし、私が出家していたら家督を継ぐ者がいなくなって家も断絶していたかもしれない。これは阿弥陀様のお陰だ」と阿弥陀様に報恩感謝し、七日七夜お念仏を称えお勤めしました。三日三夜と七日七夜、合計十日十夜お勤めしました。これがお十夜の始まりです。

真如堂では現在も十日間お勤めされています。

# 仏教歳時記

生きて身を　はちすの上にやどさずば
念仏もうす　甲斐やなからん

西山上人（せいざんしょうにん）

十一月九日は、我が宗派の祖、西山上人（せいざんしょうにん）のお誕生を祝う降誕会（ごうたんえ）が本山永観堂禅林寺で勤められます。

法然上人の弟子として、長い間、おそばで教えを聞いておられた西山上人。

至らない私が、至らないまま救われる有難さに思わずこぼれ出るお念仏、「よろこびのお念仏」が西山派のお念仏です。

永観堂禅林寺

## 雑記抄～災難に遭う時～

人生、自分の思う通りにはいきません。お釈迦さまは「この世は苦である」と言われました。老いたくなくても老い、病気になりたくなくても病気になり、死にたくなくても、いつかは寿命がやってきます。人生は苦しみと共にあります▽

「災難に遭（あ）う時節には遭うがよく候（そうろう）。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法（みょうほう）にて候（災難に遭う時は災難に遭い、死ぬ時は死を受け入れる。これが災難から逃れる最良の方法です）」江戸時代の僧、良寛和尚（りょうかんおしょう）の言葉です▽この言葉は、良寛和尚の友人で俳人の山田杜皐（とこう）が、三条地震と呼ばれる大地震で子を亡くした時、良寛和尚が杜皐に送った見舞いの手紙に書いた言葉です▽一見（いっけん）、冷たい言葉に感じますが、良寛和尚は杜皐に〝人間の力でどうすることもできないことは、どんなに辛くても、それを受け入れるしかありません。受け入れた時、はじめて苦しみは離れていくのです〟と伝えたかったのでしょう▽「災難に遭う時節には遭うがよく候」という言葉は、コロナ禍の現在、「ウィズコロナ」と言えます。